〜パネルデータ回帰分析モデル用データ〜

・漁獲量を海面漁業生産統計から抜き出しているので、分類の括りが大きい。

→〇〇類となっている分類は、資源評価から個別に漁獲量を抜き出した。

・当パネルデータ回帰では、目的変数がLogBvBmsyであり、この値はRAM Legacy Stock Assessmentから得ている。

→二つのデータソースからデータを入手しているため、種の分類が異なる。特に、漁獲量の分類は〇〇類の様な大きな括りとなっていることが多い。

・できるだけ情報量を多くしたいため、RAMデータの種に合わせて、生活史情報を付与する。漁獲量は等分する。

※例：カレイ

漁獲量データ：カレイ類

RAMデータ：ソウハチガレイ・ムシガレイ・ヤナギムシガレイ(ササガレイ)

生物史情報：全てのカレイ

この場合、漁獲量の扱い方が難しい。最終的には種のカテゴリー単位になるので、種にこだわる必要は特には無い。しかし、漁獲量が情報量の大部分を占めるため、漁獲量に対して適切な生活史情報を付与したい。漁獲割合が不明なため、デフォルトとしては、等分で漁獲量を与える。言い換えると、前提としてこの世界では3種のカレイしか漁獲されていないとしている。

→資源評価を行なっているのは日本なので、種別の漁獲量はもちろん存在している。一個一個調べる必要がある。故に暫定値として等分漁獲量を付与しておき、順次更新していく。

→結果をFull Stock Assessmentと比較して、修正していく

RAMデータと漁獲量の入ったデータ(BvBmsy\_RAM\_JP\_&\_Landing\_Kei.csv)と日本の水揚げデータ(海面漁業生産統計)に含まれる種の生物情報(FishBaseから入手)を合わせてパネルデータを作り、回帰分析する。両データを結合する際のKeyはSciNameとする。

データ設計メモ

・フグ類−日本の資源評価の系群と照らし合わせるとトラフグであることが判明。(Japanese pufferfishが具体的にどの種を指すのか不明なので、デフォルトではトラフグの生活史情報を付与)。2系群含まれているので漁獲量は2等分。

・カレイ類−RAMデータには3種のカレイが含まれている。各カレイの漁獲量は資源評価記載の値を付与。

・ヒラメ−RAMデータには1種4系群のカレイが含まれているので、漁獲量は単純に4等分して付与。

・マサバ−RAMデータには2種のマサバが含まれているので、漁獲量は単純に2等分して付与。

・カタクチイワシ−RAMデータには1種3系群のカタクチイワシが含まれているので、漁獲量は単純に3等分して付与。

・マアジ−RAMデータには2種のマアジが含まれているので、漁獲量は単純に2等分して付与。

・マイワシ−RAMデータには1種2系群のマアジが含まれているので、漁獲量は単純に2等分して付与。

・マダイ−RAMデータには1種3系群のマダイが含まれているので、漁獲量は単純に3等分して付与。

・ズワイガニ−RAMデータには1種2系群のズワイガニが含まれているので、漁獲量は単純に2等分して付与。

・ゴマサバ−RAMデータには1種2系群のゴマサバが含まれているので、漁獲量は単純に2等分して付与。

・スケトウダラ−RAMデータには1種2系群のスケトウダラが含まれているので、漁獲量は単純に2等分して付与。

・ヨシキリザメ−漁獲量データを日本周辺国際魚類資源調査から入手。

・カジキ類―blue marlinはクロカジキ・striped marlinはマカジキ・swordfishはメカジキ。

・コノシロ−ニシン目のニシンやイワシは回遊魚であるが、ニシンは大規模な回遊を行わないため、種のカテゴリーは33のMiscellaneous coastal fishes(沿岸魚種)を付与。

・キチジ−キチジの資源量は1月時点のものを採用しているので1995年が無い。したがってNAを付与。

・サケ類−サケ類はGUMのサンプルの値を使用している。日本の資源評価でのBmsyが不明だったので上記のような処置をとった。